

『思い思いの若者たち』

不適切な「いじめ」「不登校」対応は長く禍根を残す

法人理事 布袋 太三

「いじめ」や「不登校」の数が毎年増え続けているのはどう考えても尋常ではない。

学校がどの子にも楽しくて居心地の良い所だったらこうはならない。要するにある子どもたちにとっては現実の学校がどうにも耐え難いほど辛く居心地の悪い所になっているということだろう。学校はまずはこのことを真剣に謙虚に受け止めなければならない。そして、少しずつでも彼らに寄り添う改善策を編み出すため知恵をしばるべきだと思う。

しかし、残念ながら現在の学校はそうした努力と工夫になかなか踏み出そうとしない。

「いじめ」「不登校」はどの学校にも起こりうるとしながらもほとんどの学校はそれらを想定した学習や組織づくりに積極的に着手しようとしていないのではないかと。

たとえば、一人一人の生徒に自然に心配りが行き届くような普通の学級経営の有り様についてよく議論し合っているとか、生徒理解のための発達心理などの勉強会が自主的に行われているとか、また、いざ「いじめ」が発生したとしても担任の先生が孤軍奮闘するのではなく学校全体で助け合って対応する仕組みがすでに出来あがっているとか…。私にはこうした基本的なことがそもそも手付かずのままではないかと思えてならない。

それからあえて二点ほど留意してほしいことを挙げると、まず「いじめ・不登校」への対応にキャラの強い学級担任や管理職が過剰な個人プレーに走ることがあるが、これは絶対に禁物であること。大事なのは関係する先生方が発生した事案についてよく話し合って分析と指針を打ち出すことで、そしてそれに沿って学校ぐるみの組織的な対応が丁寧に実践されていくことにあるのだ。もう一つは事が起こった後の学校の対応に誠意や謙虚さに欠ける姿勢が少しでもある場合は保護者との軋轢は必至となるので肝に銘じておきたい。

かつて私たちが関わった事例はまさにそうした典型であったことを、私は今苦々しく思い出している。少し素描すると、もう十年近く前になるが、ある母親が「いじめ」に絡んで学校の対処が不満だと私たちを訪ねてきたことがあった。初回面談で母親は3時間ほど涙ながらに子どもの受けたいじめと学校の杜撰な対応を訴えた。学校の配慮のなさや不手際があまりにも際立っていたので、私たちは急ぎ教育委員会に連絡し、学校との話し合いを開始した。当初私たちは数回も話し合えば学校と保護者との関係はほぐされ、その後は解決へと進むと目論んでいた。しかしこれはまったく甘かった。学校の対応は話し合いを重ねる度にさらに親の怒りを増幅させ、肝心の被害生徒に至っては学校への不信を一層募らせ、抗議の意思を込めて不登校へと入ってしまった。確かに、傍目にも学校の対応は場当たりのであったし、なぜか母親の気持ちや要望に真正面から応える態度に欠けてもいた。その上、学校を挙げて取り組む姿勢などは端から持ちえていなかったようでもあった。私たちは何度も打ち合わせを重ねた。この案件での会議録は数十ページにも及び、弁護士や精神科医との話し合いも相当な時間を費やした。もちろん家族や学校関係者との話し合いは数え切れないぐらい繰り返され、私への電話での相談は時に深更にまで及んだ。被害生徒は不登校に入った直後の数日間は最悪の精神状況を呈し、不測の事態寸前の危うさに陥りつつもギリギリのところよく耐えた。

その後、健気に努力を続けたこの生徒は現在、ある国立大学に在学しているが、今なお精神科医の治療は継続していると思われる。

思い起こせば誠実な対応を怠り事態を迷走させた学校の責任は実にきわめて重い。

「いじめ・不登校」への不適切な対応はさまざまな禍根を長く撒き散らし、一人の生徒の人生を壊しかねないことを関係教師たちは今更に深く心に刻むべきだと私は強く思う。



BBQとわらあみ体験

10月26日にwith you 事業の一環として、「BBQと、わらあみ体験」イベントを実施しました。キャンプ場は那智勝浦の円満地公園と遠方ではありましたが、バスに揺られて出かけていきました。現場に到着すると慌ただしく食事の準備が始まりましたが、各々火おこし・食材の準備等、作業を分担してテキパキと動いていました。初めて出会うメンバーもいる中でしたが、いざ食事が始まると、焼く係・食べる係と譲り合いながらコミュニケーションを図っていました。

食事の後に出来たスキマ時間を利用して、思い思いの場所へ見物に行く姿も。犬・にわとり・ヤギ(!)に興味深げに近づいて行く人、川のせせらぎに耳を澄ませてゆったり過ごす人、売店の商品やレンタル品を物珍し気に眺める人など、過ごし方は様々でした。その後は場所を移してわらあみを体験しました。インストラクターである熟練者さん方から、ゆっくり丁寧に教えていただきました。すぐコツをつかんで長大な縄をなっていたり、うまくできないと笑い、勢い余って縄をちぎってしまったり、早くも指導者として他のメンバーに教えて回ってくれたりと三者三様ならぬ、15者15様の楽しみ方がありました。時間が足りず、バスに乗るギリギリの時間までわらと格闘し、帰途に就きました。

